

# 喪失を埋める

—アゴタ・クリストフ「悪童三部作」における  
「書くこと」についての考察—

平 川 佳 湖

## 序論

本論文では、アゴタ・クリストフ (Agota Kristof, 1935-2011) の『悪童日記』 (*Le Grand Cahier*, 1986) を中心に、その続編であり、『悪童日記』と併せて「悪童三部作 « Trilogie des jumeaux »」と称される『ふたりの証拠』 (*La Preuve*, 1988)、『第三の嘘』 (*Le Troisième Mensonge*, 1991)、そして自伝的小説である『文盲』 (*L'analphabète*, 2004) を研究対象とし、三部作の登場人物、そして作者であるクリストフの喪失の経験と「書くこと」に対する考え方がどのように作品に表出しているかを分析する。そして、クリストフと「書くこと」の関わりについて考察する。

アゴタ・クリストフは1935年、ハンガリーのオーストリアとの国境に近い村クセグに生まれ育ち、1956年のハンガリー動乱の折にスイスに亡命した。そして、スイスの時計工場で女工として働く中でフランス語を習得、1986年、フランスのスイユ社から処女作である『悪童日記』を出版した。このような経緯から後天的に習得した言語で小説を執筆した亡命作家としても知られている。しかし、アゴタ・クリストフは亡命作家として少し特異な立ち位置にある。

フランス語で小説を執筆する一方でアゴタ・クリストフは著書『文盲』の中でフランス語を「敵語<sup>1)</sup>」と呼ぶなど、フランス語を自らの母語であるハンガリー語を侵食するものとして厳しい態度を示した。このように執筆言語に批判的な態度を表明する作家は珍しい。その一方で、クリストフはフランス語で作品を執筆し、自分なりの最高を目指して執筆を続けると『文盲』の中で発言するなど「書くこと」のためにフランス語を用いることを厭わない。

本論文では「敵語」と批判する言語を使って書き続けるほどの「書くこと」への執着の理由が、クリストフの喪失の経験と結びついていることを指摘す

る。そして、クリストフの喪失の経験と「書くこと」に対する考え方がどのように作品に表出しているかを分析することで、クリストフと「書くこと」の関わりについての考察が可能になる。そのために本論文では語り手である双子をはじめとする、三部作の登場人物たちの喪失の経験と「書くこと」への関わり、「書くこと」に対する姿勢を分析する。その過程で、「悪童三部作」がいわゆる信用できない語り手を採用していることに着目し、語り手の「嘘」と作中で意図して「語られないこと」を探る。研究手法としてクリストフの自伝的エッセイである『文盲』、そしてインタビュー記事を中心とした作家研究、『悪童日記』『ふたりの証拠』『第三の嘘』からなる「悪童三部作」を対象とした作品研究を採用する。

## 1. クリストフの「書くこと」のはじまり

本章では、クリストフが「書くこと」に対してどのような価値観を持っているかを考察し、その価値観が三部作中の登場人物たちにどのように影響を与え、彼らが何のために書き続けているのかを分析する。そのため、本節ではクリストフ自身の「書くこと」に対する姿勢に着目する。クリストフと「書くこと」の関わり、そして亡命を経てそれがどのように変化したのかを自伝的エッセイ『文盲』、そして講演やインタビューでクリストフが語った内容から読み取っていく。

クリストフは子ども時代へのノスタルジーを抱えており、自分の子ども時代を「まさに祝福された子ども時代<sup>2)</sup>」と評している。幼少期から書いてあるものは何でも読まずにはいられないほどに「読むこと」には親しんでいたが、「書くこと」は殆どせず、三歳年下の弟のティラに「作り話」をすることを好んでいた。「書くこと」を始めたのは、家族と離れての寄宿舎生活の中であった。家族との別離の悲しみに耐えるためにクリストフは日記を書き始める。これが執筆の始まりであった。後のインタビューでも、家族との別れが書くことへの大きな衝動になっていた<sup>3)</sup>と語っており、クリストフの「書くこと」へのスタンス、そして作品を世間に発表するモチベーションはこの寄宿舎生活の中で培われたと考えられる。

18歳で結婚し、21歳でスイスへ亡命したクリストフは「文盲」となる。ローザンヌからチューリヒ、そしてヌーシャテル州へ渡り、ハンガリー語とは文法的に何の接点もないフランス語を用いて生活するしかない環境で過ごすこととなったクリストフは、会話でなら理解できる単語を読むことができな

い、書くことができないという困難に直面する。書いてあるものを読まずにはいられないほどに活字に執着していた女性は、書いてあるものをほとんど読むことができない世界で生きることになる。そして、「読むこと」に困難が生じたクリストフは「書くこと」に活路を見つけることになる。

クリストフのフランス語での執筆は時計工場での単調な作業のなかで詩作を行うところから始まった<sup>4)</sup>。その後、演劇スクールでの指導をきっかけに書き始めた子ども時代の思い出に基づく短いテキストが『悪童日記』の原型となる。『すばる』に掲載されたインタビューでは、この短いテキストはフランス語の文体練習のために書いていたとも語られている。フランス語での執筆を選んだのは、フランス語圏での生活をする事になり、フランス語を習得しなければ生活することができなかったという背景、そして自分の書いた作品をスイス、そして世界的に発表するならばフランス語の方がいいだろう、という考えのもとであった。しかし、クリストフにとってはフランス語の習得よりも「書くこと」が先立つのであり、母国であるハンガリーから出ない人生を送るのであればハンガリー語で書いていただろう。

——書くことの勇気をむしろ殺ぐような、困難に満ちた世界にあって、書くことへのそうした意志というのはいったいどこから生じるものなのですか。

いえ、別に「意志」などというものではありませんよ。単に必要にかられてのことなんです。若いころから、書かずにはいられない、それだけのことです<sup>5)</sup>。

クリストフにとって「書くこと」は習慣づけられたものであることが現代フランス文学の翻訳者として知られる野崎（1959-）によるインタビューから窺える。自らの内から湧き上がってくる感情、悲しみや困難、苦しさといったネガティブな感情に耐えるために「書くこと」は選び取られる。そして、「書かなければ生きる理由がない<sup>6)</sup>」というほどに、「書くこと」はクリストフにとって避けることの出来ない必然的行為となっているのである。その一方で、一時的に喪失は埋められるが完全に満たされることはなく、書くことよりも、書いたあとの方が苦しい<sup>7)</sup>、という旨のことをインタビューで語っている。このことから、クリストフにとって「書くこと」は解放の手段ではないことは明らかである。

また、クリストフの執筆活動は非常に内向きであることを指摘したい。クリストフは執筆した原稿を誰にも見せず、意見を聞くこともなかった。また、影響を受けた作家もいないという。クリストフにとって書くという営みは、あくまで自分自身のために行われているのであり、作家として作品を発表することがなかったとしても、きっとクリストフは自らの子ども時代の思い出を書いていただろう。

## 2. 双子と絆の喪失

クリストフの執筆のきっかけ、「書くこと」への執着の理由が近親者との絆の喪失をきっかけとしているように、双子の人生にも絆の喪失が大きく影響を与えている。三部作を通し双子の真実が明かされるに従って、読み手に見える双子の関係は変化し続ける。

『悪童日記』での双子の一人称は <nous> で統一されている。リュカ (LUCAS) とクラウス (KLAUS) という双子を区別する名前が明らかになるのは双子が離れ離れになって以降、つまり『ふたりの証拠』からであり、『悪童日記』中では二人は個人として区別されない。「学校」の章で語られる回想において、「お母さん」が「私よく知っているもの。あの子たちがふたりでひとつの分かちがたい人格を持っているってこと<sup>8)</sup>」と語るほどに双子は不可分の存在であり、「校舎一棟分の距離がほくらの間を分け隔てた」だけで代えがたい苦痛を味わい、意識を失ってしまう<sup>9)</sup>ほどである。双子は不可分のひとつの生き物、ふたりでひとりの人間のように描写され、分かたれることに何よりも苦痛を覚える。彼らの在り方は故郷、そして母親との絆を失ったことで、さらに強くお互いを心の支えとしているように感じられる。双子は「小さな町」で様々な困難に苛まれるが、彼らには不思議と何をやってもうまくいくような、万能の存在であるような、そんな気配が漂っている。例えば、「学校再開」の章では盲目と聾啞の双子を演じ、初等教育視学を騙してしまう<sup>10)</sup>。「おばあちゃん、ぶどう畑を売る」の章では、将校に対し十代前半の子どもが完璧に交渉し、葡萄畑と引き換えに水道と電気、風呂場とラジオを手に入れる<sup>11)</sup>。双子はありえない、と思うようなことでも可能にし、強かに生き抜いていく。

『悪童日記』の最後、「お父さん」の章で、双子は父親の死体を踏み越えて「ふたりでひとつの分かちがたい人格」からリュカ (LUCAS) とクラウス (CLAUS) になる。国境を越えて双子の子ども時代は終わる。離れ離れになっ

た彼らには、二人でいるがゆえの強さはなくなり、何もかもがたやすく思えて何もかもがうまくいくような不思議な力はもうない。これは、乗り越えなければならない最後の試練であり、個人としての生活の始まりである。

では『ふたりの証拠』で離別した双子たちはどうなるのか。リュカはクラウドと別れたことにより、「死ぬほどの孤独」を味わうことになる。そして、耐え難い喪失を埋めるためにリュカはマティアスとの生活に執着する。リュカは自らとマティアスを引き離そうとするものに非常に攻撃的になり、マティアスに「世界でただひとりの存在」だと語るが、これはクラウドとの双子的な関係をマティアスと築き直そうとしているに過ぎない。また、リュカは外交的になり、それによって「小さな町」の住民たちの名前も明らかになる。

『第三の嘘』では双子が発砲事故をきっかけに幼い頃から離れ離れの生活を送ってきたことが語られる。4歳を境に彼らは離別し、双子の絆というものは感じ取ることが出来ないほど薄いものになっている。しかし、「小さな町」で孤独な日々を過ごしたリュカにとって、クラウドとの双子の絆というものは自らを孤独から慰めるよすがであった。リュカはクラウドとの絆を信じ、自分の空想の中のクラウドを探すため、50歳になって再び「小さな町」を訪れる。その一方でクラウドは家族から求める愛情を与えてもらうことが出来ず、家族がそばにいるのに孤独を味わい続ける日々を過ごす。精神を病んだ母の愛の対象は4歳のリュカに向けられ、クラウドにとってのリュカは母の愛を奪う存在である。

あれは確かに彼だ。このことを確信するのに、私にはどんな証拠も必要ない。私は知っているのだから。知っていたのだから。彼が死んでいないこと、いつか戻ってくることを、知っていた。

しかし、どうして今なんだ？ どうしてこんなに遅くなったのか？ どうして五十年もかかったのか？

私は自分自身を守らなくてはならない。母を保護しなければならない。リュカに平穏を、習慣を、そして幸せを壊されたくない。私達の生活に変動なんて望んでいない。母も私も、リュカが過去を掘り返したり、回想したり、母にあれこれ聞いたりすることに耐えられない。

私はなんとしてでもリュカを遠ざけなければならない。彼が酷い傷口を再び開こうとすることを阻止しなければならない<sup>12)</sup>。

リュカとの再会に際しても、クラウスが一番に考えることは、母とのいびつでありながらも平穏な日常が過去の象徴であるリュカによって崩壊することへの恐怖である。クラウスはリュカの介入を拒み、双子の再会は幸福で祝福されるようなものにはならない。

リュカとクラウスが失ったものは家族、そして帰る家である。社会的な成功も、複数の女性との交際も双子の心を満たすものではなく、双子は周囲の人々から自分がまるで疎外されているように感じながら生きている。彼らが求めているものは、母をはじめとする近親者からの愛や、想いあった相手と愛し合うことであるが、しかし彼らはそれすらもままならない。双子は愛というものに対し、解消されることのない空虚さ、満たされなさ、喪失感を四歳から五十歳になるまで抱え続けている。子ども時代、双子が二人でいた頃の無敵さはもうなく、彼らの人生は悲しみを増していく<sup>13)</sup>。

### 3. 「嘘」を書くことで喪失を埋める

「悪童三部作」は「書くこと」が非常に重視された物語である。一人称小説の『悪童日記』だけでなく、三人称小説の『ふたりの証拠』、『第三の嘘』も双子が書いた創作物であり、双子は常に三部作の語り手として存在する。クリストフの設定では最初の二冊、つまり『悪童日記』と『ふたりの証拠』、そして『第三の嘘』の半分はリュカが、残り半分はクラウスが書いたものである。

双子の作文には執筆規則が存在する。「作文の内容は真実でなければならない<sup>14)</sup>」「感情を定義する言葉はとてども曖昧だ。そのような種類の言葉を用いることは避け、物質や人間や自分自身、つまりは事実の忠実な描写にこだわるほうがいい<sup>15)</sup>」というものである。彼らは真実に非常に強いこだわりを持つ一方で、以下でみるように「信用できない語り手」としての側面をもちあわせている。『ふたりの証拠』においてリュカの養子であるマティアスは首を吊り自らの命を断つ。そしてこの場面ではリュカが事実には忠実な書き手ではないことが示唆される。

リュカは自分の家に帰る。彼の机に腰掛け、子供部屋の扉に目をやって、そして学習ノートを開いてこう書いた。

「マティアスのことはすべてうまくいっている。あの子は学校でも変わらず一番の成績をとっていて、そしてもう悪夢を見ることはなくなっ

た<sup>16)</sup>」

マティアスの死を受けてリュカが行ったことは「マティアスの死」という事実の記録ではなく、すべてが上手くいった未来を書くという逃避である。「書かれたこと」と事実の乖離がここで明らかになる。また、『第三の嘘』においてリュカが「書くこと」について語る内容に着目したい。

私は彼女に、自分が書こうとしているのは事実の話だけれども、しかしそれはある時点までなのだ、と話す。話が全て事実であることに耐えられなくなってしまうから、変えざるを得なくなってしまうのだ、と。私は彼女に、私は自分の身の上話をしようとしているけど、出来ない、勇気がない、それはあまりにも自分自身を傷つけるものなのだと言ふ。だから、私は全てを脚色し、物事が実際に起ったとおりでなく、こうあってほしかったという思いのままに書くのだ、と<sup>17)</sup>。

『第三の嘘』では、リュカが書くものは「作り話」であるということへの言及が繰り返される。リュカは自分の喪失に満ちた人生を記録することが出来ず、双子の兄弟が自分のそばにいる「作り話」を書く。『悪童日記』で双子が語る「事実の忠実な描写」は、リュカがやりたいと望んでも出来なかったことなのである。孤独だったリュカが書いた日記は、自らが希求する双子の兄弟がそばにいて絆が失われていない世界であり、何もかもがうまくいく子ども時代の話だった。リュカはノートへの執筆について「はじめての嘘を書き記した」と述べており、最初から真実を書くことはできなかったのである。

書く内容がどんどんと真実から離れていってしまうということについては、クリストフも言及している。『悪童日記』は兄テオとの記憶を中心とした「祝福された子ども時代」の思い出をベースに書かれたものである。語り手である双子が用いる一人称「ぼくら」は、もともとは「兄とわたし」であり、テオとクリストフが双子の原型となっている。クリストフが当初書こうとしていた思い出は形を変え、クリストフは少年になり、兄弟は双子になって、内容もクリストフの幼少期とは異なるものになっている。「男の子の成り損ね (garçon manqué)」であったクリストフにとって、少年としての子ども時代は作り話でしか叶わない望んだ姿でもあったのだろう。

リュカとクラウスはクリストフとの共通点を多く持ち、それはふたりの喪失の経験、即ち故郷から離れて暮らすことや、周囲の人々との離別のみならず、執筆のスタイルや言語にも反映されている。例えばクラウスの印刷工場での詩作は、クリストフが時計工場の女工として働きながら詩作を行っていた経験に基づくもの<sup>18)</sup>であり、リュカは外国語で物語を書くひとりの亡命作家であること<sup>19)</sup>も描写されている。そして双子の執筆の動機は喪失の経験に結びついたものであり、その描写は特にリュカに顕著である。クラウスの詩作がサラと別れ、母との暮らしのなかで始まったものであることから、クラウスの執筆も実際の生活の満たされなさをきっかけとしたものである。また、語り手であり、三部作の中心人物である双子以外にも「書くこと」について描写されている人物がいる。『ふたりの証拠』におけるマティアスとヴィクトールに着目したい。

マティアスは一冊のノートに作文を執筆する。実の母親であるヤスミースに置いていかれた悲しみ、学校でのいじめ、そしてリュカへの独占欲に苛まれ、それらに耐えるために書き続ける。マティアスもまた、近しい人との絆を喪った少年である。リュカから受ける愛情や執着も、クラウスの代わりを求めてのものであるため、マティアスの心を満たすものではない。マティアスの作文の執筆はリュカを真似してのものであり、リュカがその内容の一切をマティアスに見せようとしなないのと同様、マティアスも何を書いているかをリュカ、そして読み手に明かさない。マティアスは自殺する際に自分のノートを燃やしてしまう。そのため、マティアスの書いていた内容は、他者には一切知らされないままである。この行動からは、マティアスの作文、書くという営みの全ては自分自身のためのものであり、誰かに読ませるものではなかったことが窺える。マティアスは自分の喪失に耐えるため書かずにはいられなかった、自分のためだけに「書くこと」を続けた人物である。

『ふたりの証拠』で物語を書くために殺人を犯し、その死体の傍らで作品を書き上げたヴィクトールは、本を書くことについて以下のように語る。

私はね、リュカ、全ての人間は一冊の本を書くために生まれてくるのであって、他に何の目的も持っていないと確信しているんだ。その本が偉大なものであろうと、凡庸なものであろうと、そんなことは関係ない。何も書かないものはどこにもいないようなもので、何の痕跡も残さずに地上を通過しただけなのだから<sup>20)</sup>。



ヴィクトールは「書くこと」を生きる目的として据えている一方で、書く困難に苛まれる「書けない人物」として描かれている。ヴィクトールの目標は一冊の本を書くことであり、50歳になってから再度一冊の本を書くために家と店を売り払って、本を書くことが出来る環境を求めて姉のもとへ行く。しかし、ヴィクトールは姉との生活の中でも何も書くことが出来ず、環境に不満を抱くばかりであった。ヴィクトールが初めて一冊の本を書き上げることが出来たのは、姉を殺したときであり、近親者との絆を自らの手で断ったときである。絆を喪って初めて、ヴィクトールは「書くこと」に成功したのだ。

双子以外の作中の人物たちの書く営みも、近親者との絆の喪失に結びついている。「書くこと」への引き金、そして書き続けることへの熱意の源泉は喪失の経験、そして埋まることのない喪失感であることは明らかである。そして、作中の人物たちの抱える喪失は、生きている限り埋まることはなく、家族の再会は墓の下でしか起こり得ないこともまた、作中<sup>21)</sup>やクリストフのインタビュー<sup>22)</sup>で示唆されている。つまり、彼らは生きている限り書き続けるしかないのである。

「悪童三部作」の登場人物たちが抱える喪失、つまり故郷や絆の喪失はクリストフ自身も抱えているものである。クリストフが自分の作品の登場人物たちについて言及しているインタビューの内容を以下に引用する。

新しい小説には、三作の人物は一人もでてきません。ただ一つ関係があるとすれば、それは今回も亡命者たち、母国を離れた者たちを扱っているという点でしょう。それから、書くことの困難さというテーマもまた出てきます（笑）。結局、どの本の中でも書くことそのものについて書いてしまうんですよ。第一作には書き方のルールが述べられているし、第二作では何も書けないヴィクトールが出てくる。第三作でも二人は書いている。「書く人」がいつでも出てきてしまうんですね。書くことに取り憑かれた人々といってもいいでしょう<sup>23)</sup>。

クリストフは「悪童三部作」で故郷を失い「作り話」を書き続ける双子の姿を描いた後、『昨日』(Hier, 1995)でも亡命と「嘘」の人生を語る男性を描いている。クリストフは自らも「書くこと」に取り憑かれながらも、喪失を抱えて「書く人」たちのことを描き続けた。喪失は埋まることはなく、故

郷、絆を失った人々は喪失感を抱えて生き続けなくてはならない。喪失を埋めるために「書くこと」を続けても、一冊の本を書き終えたからといって幸福になれることはなく、喪失感は再び湧き上がり、それを慰めるためにまた書き続けなくてはならない。「悪童三部作」はクリストフの埋まることのない喪失を埋めるために書かれた物語のひとつであり、作中の「書く」登場人物たちには一貫してクリストフの喪失と「書くこと」についての考え、そして経験が反映されている。

## 結論・考察

アゴタ・クリストフは、故郷そして絆の喪失を経験し、それを抱え続けたまま執筆を続けた作家である。クリストフにとっての「書くこと」の始まりは、家族と離れて寄宿舎で暮らす悲しみに耐えるための行為であった。そして、喪失と離別を繰り返し続ける人生の中で、クリストフにとって「書くこと」はなくては生きていけないほどのものへと変化した。クリストフにとっては「敵語」を使うことも「書くこと」も、生きるためには必要不可欠なことであると同時に、自分自身を傷つけ、苦しめる行為である。しかしながら、クリストフは母語ではないフランス語を「敵語」と呼びながらも、その言葉で最後まで作品を書き続けた。

「悪童三部作」の双子もまた、クリストフ同様に故郷の喪失、そして家族との絆の喪失を抱える、「書くこと」に取り憑かれた人々である。『悪童日記』で事実の正確な記述を望んだ双子はしかし、喪失に満ちた現実を書くことが出来ず、嘘に満ちた「作り話」を書き続けた。リュカとクラウスをはじめとする「悪童三部作」の「書くこと」に執着する人々には、クリストフの喪失と「書くこと」についての考え、そして経験が反映されており、彼らもまた喪失をきっかけとして「書くこと」を始め、喪失を埋めるために書き続けている。

本論では「悪童三部作」を中心に考察したが、クリストフは他の作品でも喪失を抱える人々、そして「書く人」のことを描き続けている。特に「悪童三部作」の後に発表された『昨日』、また「悪童三部作」以前に書かれ、三部作と関わりがあると推測される『マティアス、きみは何処にいるのか?』

(*Où es-tu Mathias ?*, 2006) も分析の対象に加えることで、クリストフと故郷の喪失、そしてそれに伴う絆の喪失と「書くこと」の繋がりについてさらに詳細な考察が可能になるだろう。

## 注

- 1) Agota Kristof, *L'alphabète*, Éditions Zoé, 2004, p. 24.
- 2) 野崎 歙、「『書くこと』に憑かれた亡命者」、『すばる』17巻8月号、集英社、1995年、102頁。
- 3) アゴタ・クリストフ、清水邦夫、「亡命・別離・言語をこえて」、『中央公論 文芸特集』12巻3号、1995年、103頁。
- 4) Agota Kristof, *op. cit.*, p. 42.
- 5) 野崎 前掲書、106頁。
- 6) 浅野素女、「『悪童日記』の著者、アゴタ・クリストフへのインタビュー」、『ミセス』446号、文化出版局、1992年、288頁。
- 7) 同書、288頁。
- 8) Agota Kristof, *Le Grand Cahier*, Éditions du Seuil, 1986, p. 26.
- 9) *Ibid.*, p. 27.
- 10) *Ibid.*, pp. 161-163.
- 11) *Ibid.*, pp. 164-166.
- 12) Agota Kristof, *Le Troisième Mensonge*, Éditions du Seuil, 1991, pp. 111-112.
- 13) 野崎 前掲書、103頁。
- 14) Agota Kristof, *op. cit.*, 1986, p. 33.
- 15) *Ibid.*, p. 34.
- 16) Agota Kristof, *La Preuve*, Éditions du Seuil, 1988, p. 170.
- 17) Agota Kristof, *op. cit.*, 1991, p. 14.
- 18) Agota Kristof, *L'alphabète*, Éditions Zoé, 2004, p. 42.
- 19) Agota Kristof, *op. cit.*, 1991, p. 95.
- 20) Agota Kristof, *op. cit.*, 1988, p. 107.
- 21) Agota Kristof, *op. cit.*, 1991, p. 187.
- 22) 野崎 前掲書、106頁。
- 23) 同書、106頁。